

齋藤公子の障害児保育観

幼児教育選修 上杉 陽子

I. 研究の目的と内容

近年、発達障害のある幼児や、診断をされていなくても発達に何らかの遅れが見られる子どもたち、いわゆる「気になる子」が保育の場に存在することは一般的になりつつある。私は現在まで保育所実習やボランティアなどでそのような障害のある子や「気になる子」に出会ってきた。障害については種類や程度が様々であり、原因などまだ明らかになっていない部分が多いため、保育現場でも支援や対応に頭を悩ませている。どの園にも障害のある子ども、その疑いのある子どもが存在する今、障害児保育、統合保育について深く学び保育者として保育方法を考える必要があると感じた。

そこで本研究では、日本で最初に統合保育を行ったとされる齋藤公子(1920-2009)のさくら・さくらんぼ保育について学び、今後の障害児保育、統合保育の方向性を考えることを目的とする。

II. 齋藤公子の保育思想

(1) 反復説

反復説とは、ドイツの生物学者であり、哲学者のエルンスト・ヘッケル(1834-1919)が1866年に唱えた当時の生物発生理論である。簡単に言えば、「個体発生は系統発生を繰り返す」と言われている生物の考え方である。図1は、人間の赤ちゃんが母親のお腹に宿ったときから25歳になるまでの個体の歴史(個体発生)を、母体に卵子が宿ってから誕生するまでの10か月として系統発生と個体発生の関係を表したものである。個体発生に見られる「魚→両生類・爬虫類→哺乳動物→サル」という順序と、系統発生に見られる「えら→肺→毛→剛毛」という順序が平行関係になっていると

いうことが「個体発生は系統発生を繰り返す」という反復説の考え方である。

これらの反復説の考え方から分かる確かな人間(子ども)の特徴は、単純なものから、複雑なものへという、ひとつの方向性を持っているということ。また、成長していく順序には、逆行や逆転がないということである。保育で子どもの運動機能、発育を見ていて、問題を感じたらこの反復説から子どもの発育段階や問題を解くヒントをつかむという考え方がさくら・さくらんぼ保育の根底にある。

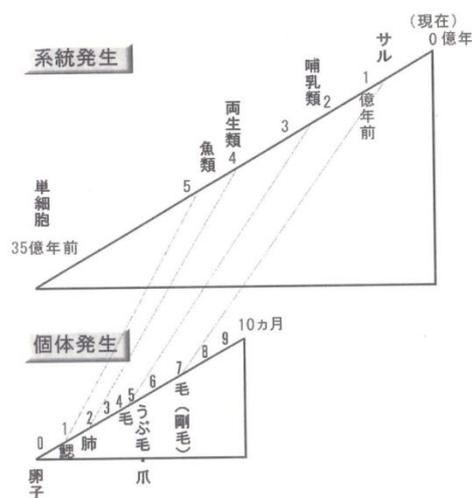


図1 系統発生と個体発生の関係

(2) 身体の発達と脳の発達の関係

就学前の乳幼児期 0～6歳までの運動は単に体を強くするという目的のみではなく脳の発達のため、つまり知的発達のために大変重要であるという考えのもと、齋藤は特に手や足の指の発達を大切にしている。これは、指が「突き出た大脳」と言われるように、指の発達と脳の発達に深い関係があるからである。

皮膚感覚の刺激も乳幼児期に重要な役割を果たしている。齋藤は、生物の歴史から言って、最も基本的な感覚機能としての皮膚感覚の発達を大切に考えて、水遊びや砂場遊びを十分に確保している。

(3) 自然のもつ良き感覚を子どもへ

斉藤は、玩具は自然の木の触覚、自然の感覚を育てるもの、絵本は内容まで吟味したものを与えることにこだわっている。プラスチックやビニールなどの冷たい石油製品は与えない。特に0歳の時には、あらゆる感覚器官を通して入る刺激がそのまま脳にすりこまれて、「快」「不快」の認識が育ってしまうのである。“手織木綿の肌触り”“和紙のやわらかみ”“檜の床の快さ”等が人間教育の基礎にどうしても必要と思い、こだわっているのである。

(4) 子どもの生体の成長をよく待つこと

自然の中で様々な体験を通して培われた運動機能、感覚機能や自主性、自発性こそがその後の教育の土台となる部分であり、6歳までに十分にのびのびと遊ばせた子どもは、集中力があり勉強を好きになる、また創造的な絵を描けることが多いのである。

子どもたちに目先の結果だけを求めるような教育をせず、体ができてくるのを待つこと。その土台をしっかりとつくてこそ、その後の発達ができるのである。

(5) 感性を大切に

子どもは新生児の頃から生理的な快、不快を感じ表現するのである。しかし周囲の大人が鈍感であって、また目が行き届かず、不快の表現に気がつかなければ、やがてその子は泣くことを諦め鈍感になってしまう。こうした生理的不快に対しての鈍感さをなくすために、子どもには、6か月からオムツを取ってパンツをはかせ、また帽子、靴下等の不快感を抱くものは身につけさせないようにする。見るもの、触れるもの、食物、住居、衣類、玩具、絵本、音楽など、全てにわたっての快さの追求こそ子どもの感性を育てるうえで大切なものである。

(6) 人間の中で育つ

斉藤はまずは母親がひとりで子育てをしないことを提唱している。保護者が集まって、皆で勉強し合って、家庭でならどうすればよいか、保育所

ならどう皆で改善していくかを話し合い、助け合っていくことが大切である。

大人との関わりだけではなく、子ども集団の中で育つこともとても重要である。

斉藤は、年齢の低い子は年齢の高い子の真似をして大きくなる、年齢の大きい子は年齢の低い子の世話をして大きくなる、という考えから、異年齢の子ども同士が関わる場を大切にしている。自分と同じくらいの子どもたちや、自分より大きい子どもたちがそばで遊ぶ姿を見せると、それを見て自分も動くようになるのである。

III. さくら・さくらんぼ保育の内容

(1) リズム遊び

リズム遊びとは、保育士が弾くピアノに合わせて体を動かす遊びである。さくら・さくらんぼ保育においてこのリズム遊びが重要とされているのは、脳の発達と指の発達が深く関わっているからである。

知的障害児がどの子どもと同じように足の裏の発達が遅れているのに気付いた斉藤は、土踏まずと脳の発達の関係について知った。そして脳の発達のために、反復説になぞらえて、脊椎動物の進化の過程で必要であった運動を取り入れたリズム遊びを子どもの発達に合わせて毎日行っている。このリズム遊びで手足の指を使ったり、全身運動を行ったりすることで運動機能の統一的な発達を促している。またリズム遊びの様子からひとりひとりの発達過程を観察し、保育内容を考える手立てとしている。

リズム遊びには様々な動きがあるが、足裏が床につかない障害児には特に基本のリズム遊びである「金魚運動」「寝返り運動」「両生類のハイハイ運動」が重要であり、これを毎日繰り返すことで障害に改善が見られている。

(2) 自然の中での遊び

さくら・さくらんぼ保育では人間としての基礎がつくられていく乳幼児期の手足の発達を非常に

重視し、それを促す環境が随所に見られる。特に腕の力は、自ら二本の足で立つための基礎として必要な力であるため、0歳児から階段を上らせる遊びを促したり、おもちゃも木製の適当な重みのある玩具を選んで与えたり、またハイハイを促すリズム遊びも腕の力を重視して取り組まれている。足の発達のために散歩は毎日の日課としている。

年長になると様々な動物の飼育をしたり、縄跳びや竹馬を自分で作ったりして様々な経験をさせる。このような自然の中で子どもたちは、入園してから様々なことを体験してきており、また保育者は子どもたちが自分でできることには絶対に手を貸さないようにし、じっと待つことをしてきたため、どの子どもができるまでやろうとする粘り強さや、集中力が育っており、自然の中で発達した指先にまで神経の行き届いた身体と、保育者を見て育った優しさによって様々なことを全員が乗り越えていくのである。

このように、自然の中での遊びに、保育者や仲間との関わりが重なって子どもたちの身体の発達、知的発達が促されているのである。

(3) 子ども同士の関わり

さくら・さくらんぼ保育園で障害児が育つには、健常児の存在が欠かせない。障害児を取り巻く健常児らの優しさ、機転を利かせての援助の仕方、粘り強さ等が障害児を支えているのである。

ビデオ「さくらんぼ坊や4」では、女兒が運動機能に遅れのある子の着替えを手伝っている場面が見られる。女兒は、自分と同じような体格の子にどのようにしたら服を着せやすいのか、知恵を働かせながら介助した。女兒は、毎日保育士が示す力の弱い仲間に対する援助の仕方を見て、自らも仲間を助けたのである。そのような健常児の中で、障害児も模倣や仲間との関わりを通して成長していくのである。健常児と障害児が互いに成長しあう。ここに統合保育の大きな可能性がある。

(4) 描画

さくら・さくらんぼ保育での子どもの描画は、

発達の観察方法としてとても重要な役割を果たしている。保育士たちは子どもが求めるままに紙を与え、描かせており、子どもたちは年に何百枚もの絵を描く。年齢ごとに子どもたちの絵を並べてみると、明らかに単純から複雑に、と認知の発達が見られ、また次第に指先が細かに、しっかりと動くようになってゆくの分かる。生活の中での激しい全身運動、腕、足腰を使う畑仕事や、床の拭き掃除、動物の飼育、ふとんの上げ下ろし、のこぎりを使っての薪切り等の仕事をさせてきたことが、このような指先の緻密な発達を促すのに役立っているのである。

毎月の職員会議では、子どもたちの全ての絵を生年月日順に並べて、全職員でひとりひとりの子どもたちの成長の度合いを確かめ合う。子どもたちが自発的に描く絵から、子どもの腕や全身の発達、その子の心理的な状態等を観察して、リズム遊びでの観察とともにひとりひとりの保育内容の改善につなげているのである。

(5) 保護者との連携

職員会議同様に、保護者との懇談会も重要である。話し合いでは、職員会議と同じように子どもたちの絵を並べて話し合う。発達の遅れた一人の子ども、遅れの原因を徹底的に探っていくことは、全ての子どもの発達を促す上で大変参考になるし、また父母全員で探り合うことで、あらゆる角度から検討することができ、大変有効なのである。

このような話し合いの場が、保護者と保育士との学び合い、共通理解を深め、保育園と家庭での連携を強めるものであると同時に、保護者同士が関わりをもつことのできる憩いの場ともなり、子育てへの不安や不満を解消することのできる場となっていたと考えられる。

IV. さくら・さくらんぼ保育の実践

表1は、発達遅滞児A子のさくら・さくらんぼ保育園での発達の様子と、保育内容の経過を表し

た一部である。

年齢	A 子の様子	保育内容・援助
1 歳 2 ヶ月	ドロツとした目で寝ていることが多く、手足をバタバタすることもあまりなかった。うつぶせにしてもほとんど頭は地について、持ち上げる力が弱い。	特に腕の力をつけることを大切にして、歩行器は使わず、他の 0 歳児たちと一緒に目が覚めると戸外に連れ出す。日光浴をしながら他の子どもたちが見える場所にうつぶせにして這わせたり、段々を上り下りして遊ばせる。 他の 0 歳児と同じように、寝返りをする頃からおしめを外し、薄着になって遊ぶようにする。 乳児の模倣期を利用して年齢の高い子や先生とともにリズム遊びをしてハイハイをするよう促す。
2 歳	歩き始めるが、まだ足の裏はふくらとしていて、0 歳児のようである。 頭は少しゆがみ、涎や鼻水が大変出る。言語はまだ片言も出ない。 しかし意欲は次第に出てきて、水道の蛇口での水遊びを好み、離れようとしない。	皮膚感覚の発達を大切に考え、水遊びを好む時期を保障する。 足腰の発達を促すため、認知の機能を発達させるために毎日散歩をする。

この表から、A 子は、乳児期から腕の力をつけていたことや、斎藤や保育士らの観察から、必要な遊びや運動をすることで身体の発達とともに脳の発達が進んだのであると考えられる。さくら・さくらんぼ保育園での、観察方法が保育に生きていることが分かる。また、この後職員間で保育内容を話し合い、A 子の就学を 1 年延ばす等の柔軟な対応や、A 子の周りの子どもたちと A 子について話し合いを行ったり、保護者に協力を求めたりして園と家庭が共に A 子の発達を促したことが、実ったと言えるであろう。

V. まとめ

現在の障害児保育において、愛知教育大学教授の小川英彦は著書の中で、これからの障害児保育の方向性についての要点として、「子どもの実態把握」、「個別の計画」、「集団の保障」、「幼小の連携」、「地域の連携」の 5 つを挙げている。『気になる幼児の保育と遊び・生活づくり』その要点をさくら・さくらんぼ保育と比較してみると、さくら・さくらんぼ保育では「子どもの実態把握」、「個別の計画」、「集団の保障」については斎藤が打ち出した保育方法により確立されており、今後の保育にも生かされるべき点である。しかし、「幼少の連携」、「地域の連携」においては十分ではないため、今後に期待したい。

〔注〕

- ・斎藤公子『さくら・さくらんぼの障害児保育』1982 年、pp.32～62、pp.79～108
- ・井尻正二・斎藤公子『ひとの先祖と子どものおいたち』1979 年、pp.60～80
- ・小川英彦・広瀬信雄・新井英靖・高橋浩平・湯浅恭正・吉田茂孝『気になる幼児の保育と遊び・生活づくり』2011 年、pp.12～15
- ・ビデオ「さくらんぼ坊や 4-4 歳と仲間一」1982 年

表 1 発達遅滞児 A 子の発達とさくら・さくらんぼ保育の援助